

研究課題(テーマ)		よろずレポート相談所 (年次を超えて学生同士が教え合い学びあう教育)			
研究者	所属学科等	職	氏名		
代表者	知能デザイン工学科	教授	高木 昇		
		教授	神谷 和秀		
		准教授	高野 博史		
		講師	増田 寛之		
研究結果の概要					
<p>1. 実施内容</p> <p>大学院生(M1)と学部生(B4)が相談員となり、実験、演習、講義のレポートを下級生に指導する場として「よろずレポート相談所」を開所した。学生同士が教え合い学び合うことで、下級生はレポートの質や理解度向上、相談員は指導能力や論文執筆能力の向上を狙っている。昨年度までの問題点を踏まえ、本年度は相談員向けのチェックシートを作成すると共に、担当教員が相談員にレポートチェック内容を事前に直接指導し、教員と相談員のチェック基準を一致させることを試みた。また、効率的な運用のために学生実験のレポート添削は時間予約制とした。</p> <p>平成28年度は、前期は月曜9-10限と火曜5-6限・9-10限、後期は月曜7-9限と金曜9-10限に図書館1階・共同閲覧室とアクティブラーニング室にてよろずレポート相談所を開設し、全50回実施した。添削科目は、知能デザイン工学概論(B1)、物理実験(B1)、コンピュータ工学(B2)、パターン情報処理(B2)、知能デザイン工学実験1・2(B3)であった。相談員は前後期あわせて40人が担当した。</p>					
<p>2. 教育改善効果</p> <p>2.1. 知能デザイン工学実験(B3)の実験報告書における効果</p> <ul style="list-style-type: none"> 相談時間を予約制としたことで98%の学生が良かったと感じていた。理由としては、混雑による待ち時間が無いこと、予定が立てやすいことがあげられた。 91%の学生がレポート内容を改善できたと回答している。役立った点として、誤字や図表の指摘、文章の書き方の他、内容指導にも及んでいた。不満として、相談員のスキルや態度の改善、実施日の拡充などがあった。次年度の継続を望むのは77%だった。事前に教員が相談員にレポートの添削ポイントを指導したため、役立った点として提出前に理解が深まった、内容の改善に繋がった等体裁以外にも効果があった。不満として、体裁以外の内容の指摘に関して教員との不一致があげられた。 相談員については、自己の学力向上に寄与し、論文作成のための勉強になったと83%の学生が回答した。自身の成長については、自身の文章をしっかりとチェックするようになった、分かり易い文章を書くにはどうすれば良いか考えるようになったという意見があった。不満として、受けに来る学生の態度が悪い、場所が狭い等があった。 教員からはレポートの体裁が整ったおかげで細かな指摘をしなくてよくなり、内容を指導できるようになつたことが上げられていた。昨年と比較して、レポートの質に特別な改善は見られないが、体裁を重点的にチェックするという目的は果たしており特別に問題点もないと感じている。 <p>2.2 その他の講義レポートにおける改善効果</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年生や2年生では、60%以上の学生がレポートの添削が役立っていたと回答した。 					
今後の展開					
<ul style="list-style-type: none"> 学生と相談員の相互にメリットがあったこと、多数が継続を望んでいたことから、次年度も継続したい。一方、義務化による影響から漫然と受けに来る学生も見受けられた。添削の義務化を緩和し、技術文書作成スキルが定着するよう、改善に努めたい。 1,2年生のレポートは体裁を良くすることを目標とする。3年生の学生実験は本年度と同様に教員が相談員に対しチェックすべき内容を指導するようにする。 					